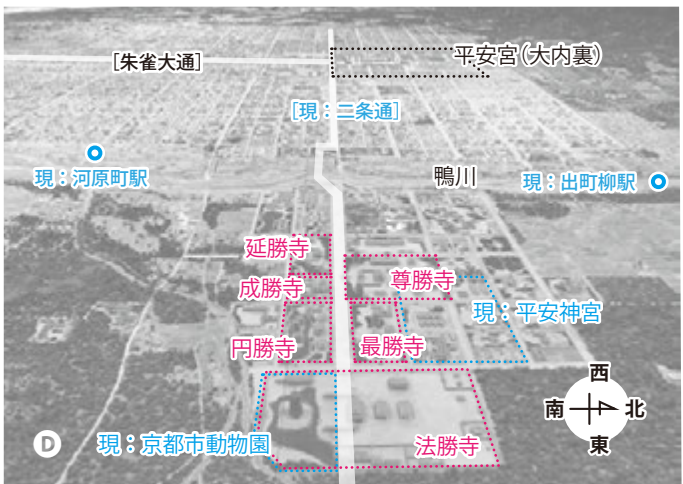


法勝寺金堂と塔の間（2024年）
写真は二条通を西から東へ向かう途中



2024年

協力：京都市歴史資料館，京都市平安京創生館，京都アスニー（京都市生涯学習総合センター）



硫黄島地区50代男性

「前の俊寛能のときは合図で松明を投げて柱松に火をつけるといって一発勝負の演出があつて、ぶじ成功しました。」

思い出話

「前の俊寛能のときは合図で松明を投げて柱松に火をつけるといって一発勝負の演出があつて、ぶじ成功しました。」

法勝寺の塔はその後260年間、平安京の空にそびえたが、1342年に火事の延焼で焼失する。日本最古の歴史文学とされる『太平記』は、京の住民が「公家も武家もともに衰えてゆく前兆ではないかと動揺した」と記録している。法勝寺の塔は、当時の京のランドマークであり、世の平和を象徴するものであったとされる。

法勝寺の塔はその後260年間、平安京の空にそびえたが、1342年に火事の延焼で焼失する。日本最古の歴史文学とされる『太平記』は、京の住民が「公家も武家もともに衰えてゆく前兆ではないかと動揺した」と記録している。法勝寺の塔は、当時の京のランドマークであり、世の平和を象徴するものであったとされる。

法勝寺の塔はその後260年間、平安京の空にそびえたが、1342年に火事の延焼で焼失する。日本最古の歴史文学とされる『太平記』は、京の住民が「公家も武家もともに衰えてゆく前兆ではないかと動揺した」と記録している。法勝寺の塔は、当時の京のランドマークであり、世の平和を象徴するものであったとされる。

法勝寺は、当時の天皇や皇后が次々と建てた6つの寺（六勝寺）の最初の寺で、敷地面積は約200㎡と最も広い。塔は平安時代の京都で最も高い81mで、その構造は、日本建築史では類を見ない八角九重になっている。この寺の由来や規模からも、俊寛がいかに権力に近い場所にいたか窺える。

俊寛は硫黄島では流刑者としてよく知られるが、実は源氏の家系で家柄もよく、当時の権力層に近い人物でもあった。A 京都の平安京にいた頃の俊寛は、法勝寺（ほつしょうじ）に務め、寺の業務を行う位の高い僧であった。

俊寛の見た風景（平安京）

硫黄島